

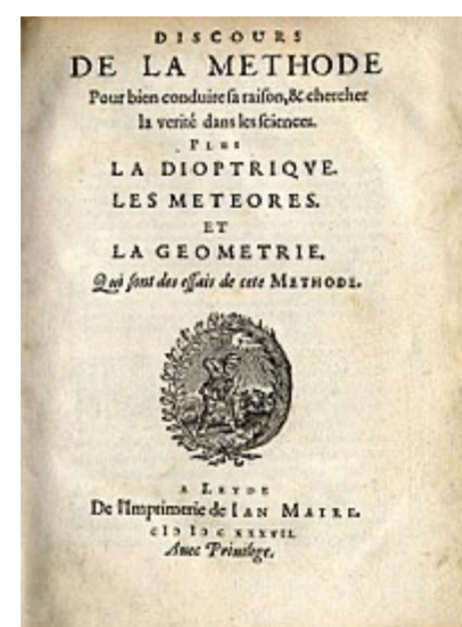
## 「ともにあること」と「ためにすること」

藤原 智也

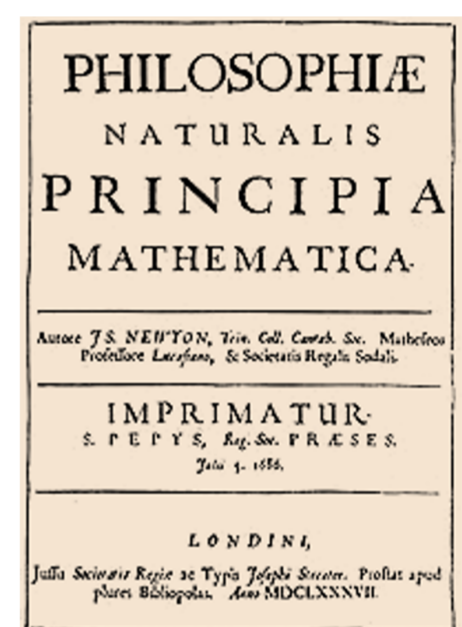
(教育福祉学部 教育発達学科)

西洋近代は、一方で自由、平等、人権といった価値を膾炙させることをその理念とし、他方で行政官僚制や資本主義市場といった巨大システムを広範に機能させることを進めてきた。この価値と機能によって我々は、前近代に比べて様々な自己決定が可能な時代を生きているのだとイメージされている。しかし、その前提となる文脈において、「作為」と「不作為の作為」が忍び込んでいることを認識することは少ない。すなわち我々は、合理性や客観性、効率性を志向させられ、不合理性や主観性、間主観性、非効率性を忌避させられている。だがこのような暗黙の選択が、非西洋圏にとっても適合的なのかは、改めて考える必要がある。

進化的にはチンパンジーと約600万年前に分岐して以降、人類は共同身体性に基づく間主観的な社会をコミュニティ単位で作成し、自然と相対しながら暮らしてきた。この分厚い蓄積の後に、芸術や音声言語の獲得（約5万年前）、農耕定住（約1万年前）、文字言語および計算の獲得（約5千年前）、普遍性概念の獲得（約2.5千年前）を経て、西洋が近代科学を樹立（約300年前）する。このように概観すると、西洋近代は、「文字言語を媒介とする契約概念」と「数学を媒介とする近代科学」を前提とした、特殊な社会だと理解できる。そして我々はその人生の大半において、これらを下敷きにする近代的な行政と市場に管理された画一的な「時間」を過ごすようになっていく。



R.デカルト  
『方法序説』(1637)



I.ニュートン  
『プリンキピア』(1687)

感情-言語-計算の順で高度な認知機能を獲得した人類は、感情を目的として言語や数字を手段とするのではなく、言語や数字そのものを目的化するようになった。これは本来、行政や市場の論理であるが、それが社会の人々の関係性まで規定するようになっていく。損得勘定やコスパのために、他者とのコミュニケーションを手段化する振る舞いである。スペック重視の恋愛や結婚、世間体のための教育虐待など、最も濃密な間主観的コミュニケーションである親密圏の空洞化が典型である。

言語や数字による「ためにすること」以前の、身体や感情による「ともにあること」。これをコミュニティ単位の実現してきた日本でのかたちに、《祭》があった。だが日本の祭を支えた寺と神社は、明治と戦後にその社会的な機能を奪われてしまい、多くの《祭》は途絶えるか観光市場に飲み込まれてしまった。我々はもう、不合理ゆえに時を忘れるほどの共同身体的な経験から、間主観的な生の営みを回復することはできないのだろうか？これは近代に批判を加えてきた芸術が問い続けてきた課題でもある。しかしながら、既に我々の多くは、行政や市場がもたらす計算可能性を手放すことによる不安に耐えられそうもない。



日本の《祭》



S.ダリ『記憶の固執』(1931)